



場。自動車の電動化で、軽量化が期待できるアルミニウム素材製品の一々が高まっている(滋賀県甲良町・古河AS)

EVの電流を高精度に検出できるサノールの自動車部品。ガソリン車用の部品で培ってきた加工技術も生かされている

が主戸の古河AS（滋賀県甲良町）の阿部茂信社長は自信をのぞかせる。同社の売上高は21年度で1233億円。今後は電動化の流

「EVシフトはわれわれにとつてゲームチャンジを起こすチャンだ」  
自動車用の配電・通線「ワイヤハーネス」で  
都新聞 ON BUSS-NESS で  
詳報は経済サイト「EVA」  
社長のインタビューの  
阿部茂信・古河へ  
込める。

# 京滋車部品企業 EVシフト

欧洲や中国で急速に進むEVシフト。トヨタが26年までにEVの世界販売数を年15万台とする方針を打ち出すなど、日系メーカーの動きもようやく本

結してきただ近年は大電流対応の配電部品「バスバー」など、電動化を見据えた製品を強化。欧米や中国の市場にも食い込み、2025年度にバスバーと電流センサー事業で売上高計50億円を目指す。

特にEVの大電流を高精度に測定できる「シャントバスバー」は、21年に北米大手のEVに採用されるなど引き合いか活発だ。20年開設の京都南工場(京都市南区)に加え、今秋には山梨県内で生産ラインが稼働する計画だが、需要増に対応するためさらなる設備投資が必要という。

えを示す。  
高度な金属加工を得  
意とする同社は創業か  
ら80年、弁ばねなどの  
エンジン向け部品を供

「どの受注がきている。生産能力の増強も進め  
るが、さらなる拠点の  
拡大が必要だ」。自動  
車部品を手掛けるサン  
コールの奈良正副社長  
共、（左）

自動車業界に電動化の波が押し寄せ、京都や滋賀の自動車部品メーカーが電気自動車（EV）用部品の開発や生産に本格シフトしている。市場では今後ガソリンエンジン関連の受注が落ち込む一方、EVの大電流に対応できる部品や車体を軽量化する技術のニーズは高まるとみられる。「100年に一度」の変革期を迎えて、各社は製品開発に注力するとともに、EV普及で先行する欧米や中国向けの販路開拓でも攻勢をかける。ただ、当面はガソリン車用の需要も続く見通しで、経営資源を集中投下できないといった移行期特有の課題も抱えている。（森静香）

ガソリン車用受注も続く  
移行期、資源集中に課題も

社長も「エンジン向け部品が減るのは分かっているが、少ない状態で残ると生産効率が悪くなる。実際にいつシフトしていくのか、頭の痛い課題だ」と打ち明ける。

厳しい現状を踏まえ、阿部社長は「日本のEVシフトも早まる可能性がある。刻一刻と変わる状況に乗り遅

ガソリン車用受注も続く  
サンコールの奈良副  
移行期、資源集中に課題も  
電動車に適したハーネスやジャンクション、ボックスなどの高圧製品群も25年度には21年度比で1・6倍の売上高に引き上げる方針。阿部社長は「EV用部品は高電圧、高電流に耐えられること、かつ小型化が求められる。特殊金属を扱うわれわれの強みが出せる」と先を見据える。  
欧州連合（EU）などが35年以降も条件付きでエンジン車の新車販売を容認する方針に転換するなど、EVシステムの先行きはなお流動的だ。ただ、EV化が進む中国市場でEV系

の約2割を占める日本の「屋台骨」で、産業の裾野も広い。EVの部品点数はガソリン車と比べ3~4割少ないとされ、シフトが進めば部品供給を担う企業への打撃は避けられない。多くの部品メーカーは事業転換を模索する一方、悩ましいのは、EVシフトが本格化するのには、独自の端子で防蝕機能を持たせた同社の製品は25年度

成長の鍵に位置づけるのは、EVの「軽量化」や「高電流・高電圧」への対応だ。EVは走行距離を延ばすための軽量化が課題で、従来の銅製よりも軽いアルミワイヤハーネスの需要が伸びる見込み。さらに、独自の端子で防蝕機能を持たせた同社の製品は25年度

## 大電流対応に需要

